

『アンチテーゼな関係 陽だまりに吹く風[7]』

著：吉原理恵子

ill：緒田涼歌

「結局、あいつの親からは直接的な謝罪はなかったんだろ？」

『うん』

「それで、いきなり弁護士がやってきて示談の話かよ？」

非常識にもほどがある。

そのくらい、未成年の一真にだってわかる。屋久谷だけではない、親のほうにも問題ありありではなかろうか。

『そうみたい。…って、いうか。薄っぺらい型通りのごめんなさいはあったみたい。謝罪と示談がセットっていう感じ？』

「…ったく、親子揃ってクソ野郎だな」

どこの何様だか知らないが。親子揃って土下座をしにくるならまだしも、弁護士頼みの示談話なんてクソバカの極みである。

（あー、腹が立つ）

いや——頭が煮える。

『そっちのほうは修平さんに全部まかせてあるから、とりあえず、おれは何も心配しなくていいって言われた』

「おまえは、きっちり怪我を治すことだけ考えてりゃいいんだよ」

神奈木のできることといえば、それ以外にない。

『うん。だから、明日もおやすみコールしてね？』

とろりとした甘い囁(ささや)きが耳に流れ込む。

——瞬間。なぜだか、わけもわからずドキリとしてしまった。

だからだろうか。それを誤魔化すように、

「なら、たまにはおまえがすれば？」

つい、口が滑(すべ)った。

（あ……マズい）

失言である。

うっかりである。

あとの祭りである。

それを口にしたら、神奈木のことだから。

——え？ ホント？ いいの？

言(げん)質(ち)を取ったとばかりに、オーバーアクションぎみに舞い上がるかと思っ

ていたら。

『ダメだよ。千堂がおれに電話してくれることに意味があるんだから』

やけに真剣な口調で言った。

ちょっと……思いがけない肩透かし？ まさか、神奈木の口からそういう切り返しにくるとは思ってもみなかった。

（そういうもんか？）

思わず一真が押し黙ると。

『好きな人から電話をもらえるってことは、それだけ気にかけてもらえるってことだから。おれだけの一方通行じゃないってことだよ？』

——出た。

神奈木が得意とするところの、無茶振り・ゴリ押し・決めつけ——の三段論法である。いつもなら、そこで、げんなりとしたため息まじりの舌打ちが出るところだが。

『おれ、すっごく嬉しい。千堂と好きの距離感がちょっとずつだけど縮まってくような気がするし』

もはや神奈木の代名詞とも言える激甘なホイップクリームに蜂蜜をまぶして垂れ流したようなハイ・トーンではなく、甘さを抑えたまろやかな艶声にねっとり耳を舐(な)められたような気がして。

(わッ。何、これ……)

一真は一瞬、息を詰めた。

ゾワリ、として。思わず首を竦(すく)めた。

ドッキリ、して。双(そう)眸(ぼう)を見開き。

いきなり、心臓がバクバクになった。

そんな自分が信じられなくて。

——ウソだろ。

——マジかよ。

——ありえねえ～～。

一人ツッコミを入れまくる一真であった。電話口で、一真が耳まで真っ赤にして狼狽(うろた)えまくっているのも知らぬげに。

『じゃあね、千堂。おやすみ』

神奈木が囁いて、電話が切れた。

本文 p47～50 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>